

主 題：救い主の誕生

聖書箇所：ルカの福音書 2章8－20節

クリスマスの出来事をみことばから見て行きましょう。ルカの福音書2：8－25まで、羊飼いが羊の番をしているときに天使たちが現われた、そのときの話です。この箇所は大きく分けると三つの話が出てきます。一つ目は「天使のメッセージ」です。二つ目は「天使たちのさんび」、そして、三つ目はそれを聞いていた羊飼いたちが行なったことです。天使のメッセージがあり、天使たちのさんびがあり、そして、羊飼いたちがそれに対して何を行なったのか、そのことが今から私たちが見て行くこの箇所に記されている大きな出来事です。

1. 天使のメッセージ 8－12節

天使は何を伝えようとしたのでしょうか？8節からこのように記されています。「さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた。2:9すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた。:10御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。:11 きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。:12 あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つめます。これが、あなたがたのためのしるしです。」と、これが野宿をして羊を見守っている羊飼いたちに天使が現われて語ったメッセージです。彼らが伝えたメッセージというのは「救い主が生まれた」ということです。いつ、どこで、何をしたのか、というように順を追って見て行きましょう。まず、いつ救い主が生まれたのでしょうか？11節に「きょうダビデの町で、」とあります。「きょう」、彼らがメッセージを告げたその日です。ということは、イエス・キリストというのは架空の人物ではなく、現実にもこの世にお生まれになった歴史上の人物です。だからこそ、私たちは全世界でこの日をこのような形でお祝いするのです。どこで？その生まれた場所は「ダビデの町で」と天使は言いました。これは、ダビデが生まれた町です。ベツレヘムの町です。今でもベツレヘムに行くと、イエス・キリストが生まれたであろうとする所に教会が建っています。イエスがベツレヘムでお生まれになったということは何を意味しているのでしょうか？今の私たちには余り大きな意味をもたらさないかもしれませんが、このメッセージを天使が告げたときに、天使が伝えたかったことは、このイエス・キリストの誕生というのは実は聖書の預言が成就したのだということです。イエスは偶然生まれたのではないし、イエスが偶然そのベツレヘムにお生まれになったのでもありませんでした。そのように聖書に預言されていたのです。救世主はどこに生まれるのか？救い主はどこに生まれるのか？ユダヤのベツレヘムでお生まれになると。その通りにイエス・キリストが生まれたということを天使がここで告げるのです。だれが生まれたのかについても、天使は詳しい説明を加えています。「この方こそ主キリストです。」と。興味深いことがここに二つ記されています。一つは「キリスト」で、もう一つは「主」ということばです。「キリスト」とは、もともとは油を注がれた者、昔では大祭司であったり、預言者であったり、王様などにこのことばは用いられたのです。この時期になると私たちがよく耳にするヘンデルの「メサイヤ」があります。ヘブル語の「メシヤ」と同義語です。後にはこれが救世主を指す称号となって行くのです。つまり、ここで天使が言いたかったことは、「きょう、預言されていた通りにお生まれになった方は、実は救世主なのだ」ということです。そして、もう一つ「主」ということばをここで言っています。主人、王、皇帝、また、夫にも使いますが、旧約聖書にあっては、「主」と言った場合、これはイスラエルの神の称号として用いられたのです。つまり、天使はここでだれが生まれたのかということを明確に教えたのです。キリスト、つまり、救世主がこの世にお生まれになったと。そして、この救世主は神であると告げています。これが天使のメッセージです。しかも、天使はしるしを与えました。恐らく、この日ベツレヘムでも何人かの子どもが生まれたでしょう。同じような状態で、ここにあるように、「布にくるまって」母親の腕に抱かれている赤ちゃんはたくさんいたはずですが、だから天使はこのように言います、一つのしるしを与えると。このお生まれになった救い主、神は、「飼葉おけに寝ている」子どもだと言います。たくさん子どもがいても、動物のえさを入れるようなところで眠っている子どもはいません。これが天使が羊飼いたちに告げた「しるし」でした。この世にお生まれになった救世主は飼葉おけの中に眠っていると。そして、何のために生まれたのか、その理由までも天使は私たちに教えるのです。それは「あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。」とあります。すべての人々のために、イスラエルの人々のために、パレスチナの人々のために、日本人である私たちのために、中国の人々のために、アメリカの人々のために、韓国の人々のために、世界中すべての人々のために、この方は生まれたのだと。何のために？そのすべての人の罪を赦すためにです。これが天使の告げたメッセージでした。だから天使はこう言っ

たのです。「今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。」と、これからわたしが伝えるメッセージというのは、すばらしい喜びの知らせであると。それは、私たちの罪を赦す救い主が来てくださったからです、この救い主は、神がこの世にお生まれになった人となられたであるお方であるということを天使が告げたのです。預言されていた通りであり、その方が現実に関今この地上に来てくださった、このようなメッセージを天使が伝えたのです。

2. 天使たちの賛美 13-14節

天使たちの賛美が13-14節に出てきます。「すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現われて、神を賛美して言った。」と、今度はたくさんの天使たちが彼とともに現われて神をさんびするのです。どのようなことを言ったのでしょうか？14節「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」と、これが天使たちのメッセージです。これが天使たちのしたことです。彼らはこのようなことをさんびしながら語ったのです。この14節に二つのことを見ます。一つは神に対するさんびが記されています。彼らは神にさんびをしたのです。「いと高き所に、栄光が、神にあるように。」と、これが大勢の天使たちが神に対してさんびしたことです。神さま、あなたはすばらしいお方だ、あなたは称賛に値するお方です、といって彼らは神を誉め称えたのです。そして次に「地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」と、今の時代、この地上に平和が来ることを私たちは心から欲していますから、この世に住む私たちにタイムリーなメッセージであるかのように思うのですが、地上に平和が来ることを天使たちが願ったのでしょうか？実はそうではないのです。ここで言われる平和とは、国々の間の平和とか、人間の間の平和ではなくて、神と人間との間の平和なのです。そのことを天使たちは語るのです。このお生まれになった方は、神と人間との間に平和をもたらしてくださるのだと。それで彼らはそのようなことをなさった神のみわざを、そして、その神を心から誉め称えるのです。神と人間との間に平和をもつ、それをこのお生まれになったイエス・キリストが可能にするとはいいます。ということは、私たちは神との平和を持っていないということです。私たちが神との平和をもっているなら、神はわざわざ来る必要はなかったのです。もっていないから救世主はそのために関来られたのだと、このみことばは私たちに教えてくれるのです。確かに聖書を見て行くと、私たち人間のことについてはこのように呼びます。「神の怒りを受けるべき子どもたち」と、私たち人間は例外なく生まれながらに、神の怒りを受けるべき者だと言うのです。また、「罪の奴隷」だと言います。「悪魔の子ども」であると記してあるところもあります。また別のところには「神の敵」であると教えています。皆さん考えたことがありますか？私は神の敵だ、私は悪魔の子どもである、私は罪の奴隷であると、生まれながらに神の怒りを受けるべき者だと。人に対してそう思うかもしれません。あの人はひどい人だと。でも自分に対しては私たちはなかなかそのようには思わない者です。でも、聖書は私たちにそのように言うのです。

なぜそうなのでしょう？その理由を見てみましょう。ローマ1:19-25を見てください。「なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。:20 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。:21 というのは、彼らは、神を知っているが、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。:22 彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、:23 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。:24 それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。:25 それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。」。ここには、どうして私たちが神の敵なのかということが記されています。まず、19節を見ると、人間は皆、神が存在していることを知っているのとあります。よく考えると分かる、神が造られたものを私たちが見るなら、それを造られた創造主なる方がいることが分かると言います。確かに神がお造りになったものは完全です。いのちがあります。それを見るとき、私たちは偶然にできたのか、それとも造られたのか、どちらかの選択をしなければなりません。いのちのないところに偶然いのちが発生することなど不可能だということを私たちは知っているのです。物が存在する以上、必ずだれかが造ったのです。この宇宙のすべてのもの、そこに存在する法則、そのようなものを私たちが見るときに、だれかがそのように計画してそのように造られた、そのことは皆分かるのです。だから、神はこの聖書のみことばを通して私たちに言われるのです。皆、創造主がいることは分かっているはずだと。私たちは分かっているがどのような選択をしているのでしょうか？この箇所から、その間違いを四つ見ることができます。

○私たちの間違い

(1) 創造主なる神を信じない

21節に「**彼らは、神を知っていながら、**」とあります。このようなことを言う人があります。何かわけが分からないけれど、人間よりもはるかに優れた存在がこの世にあることを私は信じていますと。確かに、人間の力ではどうにもならないことが山ほどあります。それらのことを考えたとき、だれかがいるに違いない、何かが存在するに違いないと思い、何かに手を合わせます。何かを崇拜しようとしします。それは人間が生まれながらに私たちを造り、この世界をお造りになった創造主なる神がいることを知っているからです。しかし残念ながら、人間はそのことを知っていながら、その創造主の前にひざまづいて創造主を崇拜し、その方に従って行くという選択をしないのです。そして、この世は偶然に出来たのである、この世は進化したのだという言い訳をもって神を受け入れようとしていないと言うのです。旧約聖書の中にこのようなことばがあります。「**愚か者は心の中で、『神はいない』と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行なっている。善を行なう者はいない。**」(詩篇14:1)と厳しいことが書かれています。ある人は神なんかいないと言うのです。でも、おもしろかったのは無神論の国に行ったとき、たとえばあの解放される前の昔のソビエトに行ったとき、彼らは神はいないと言いますが、レーニンの像があちこちに建っていて、人々はその前に花束を捧げているのです。デパートに行くとレーニンの写真が売られているのです。崇拜の対象として。人間はどんなに否定しても何かを崇拜しようとしています。それは私たちが私たち以上の存在があるということを知っているからです。そして、この自然界の美しさを見たとき、それを造られた方がいるということが分かるのです。しかし残念ながら、人間はそこまで分かっているのにその方を信じようとししないのです。なぜなら、信じたら自分の好きなことができなくなるからです。

(2) 神を崇めない、感謝もしない

「**その神を神としてあがめず、感謝もせず、**」とあります。このように私たちが生きているのも神のあわれみの故です。なぜなら、私たちはだれ一人として自分の意志で自分の力で生きている人など、どこにもいません。病気になって弱って病院で生きるか死ぬかの瀬戸際にいる人たち、家族は皆願います。もう少し生き永らえることができたなら。でも、私たちが分かっているように、どんなに強く望んでも、私たちの力でそのいのちを延ばすことはできないのです。だから、このように生きていることも感謝なのです。神の一方的な恵みでありあわれみの故なのです。おいしいものをいただいてきたことも、空気を吸い、この日を楽しむことができるのも神の恵みなのです。しかし、だれ一人として生まれながらの人間は、そのすばらしいものを与えてくださっている神を誉め称えないし、感謝も捧げないのです。当たり前だと思うのです。そのようにして神に逆らっていると言います。あなたを生かし愛して下さっている神がおられるのに、その方から必要なものが与えられているのに、その方に感謝をしないと。

(3) 神でないものを神として崇拜している

23節にこうあります。「**不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたち**に似た物と代えてしまいました。」、25節には「**それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を選び、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。**」と。なぜ人間が神の敵なのか、それはすべてのものを造られたまことの創造主なる神を信じ従って行くのではなくて、神でないものを神として崇拜しているところに大きな罪があるのだと言うのです。面白いことに、日本人は今このクリスマスのシーズンが終わって来週の日曜日になると、教会に来ることよりも皆初詣のことを考え始め、テレビでも電車の中でも広告が一変します。そして、多くの方が初詣に出かけますが、だれに手を合わせたのですか？と聞いてもほとんどの人はだれか分からない、信心する気持ちさえあればそれでいいのだと言います。問題はそれを神が望んでおられることかどうかです。神がこの聖書のみことばで私たちに教えられ、私たちに警告されることは、あなたたちは間違っている、あなたたちはわたしの敵である、なぜなら、わたし以外のものを神として拝んでいるからということです。神は人間に戒め、おきてを与えられました。十戒といわれるものですが、そこにはこのように書かれています。「**4あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。4あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。5それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神…**」(出エジプト20:4-5)と続いて行きます。もうそのときから神が警告したことは、創造主なる唯一まことの神以外のものを崇拜するなら、あなたは神に逆らっていると言われるのです。そして、私たち人間が手を合わせ崇拜している存在は、私たちと同じ死を経験する人間であったり、動物であったり、植物であったり、不完全な人間が手で造った像である、そこに大きな罪があると神は言われるのです。私たちは考えなければいけません。私たちが崇拜する対象はすべてのものをお造りになった創造主なのか、それとも創造主によって造られた被造物なのかです。神が私たちに「あなたはわたしの敵である」と言われた理由は、私たちがこの創造主を崇拜するのではなく、創造主でない被造物を崇拜していることです。

(4) 神よりも愛するものをもっている

24節にこのようにあります。「それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。」と、人間は神を愛するよりも自分を愛し、自分の好きなように生きて行きたいのです。快樂を愛したり、ある人々は知恵を愛したり、物を愛したり、それらが神よりも大切な存在になっていると言うのです。人文主義などが中世に起こって神中心の考え方から人間中心の考え方に移行してきたと、しかし、それは中世に始まったことではありません。人間は生まれながらに神よりも自分を愛する者である、神よりも自分の快樂に従って生きて行きたいのです。神を喜ばせることよりも自分の快樂を満たして自分を喜ばせたい、それが人間の本質です。神が言われるのは、人間は神を愛するよりも神以外のものを愛したゆえに、神はそれならあなたの好きなように生きて行きなさいと、その結果人間は罪に罪を重ねたと。このみことばは同性愛を指摘しています。世の中は、そのように生まれてきたのだとか、病気であると言うかも知れない、しかし、聖書が教えているのはそれは罪だということです。そして恐ろしいことに、このようなことを講壇から言うところになると、世界中にいっぱい出てきているのです。北米のカナダにおいても、ある所でこのようなことを話すと大きな問題になります。しかし、それは私の好みのことを言っているのではなく、聖書のみことばが言っていることを伝えているのです。人間は自分の好きなように生きて行きたい、干渉されたくない、邪魔されたくない、そうすると、自分の好きなように生きて行けるように環境作りをします。法律を変えなければいけなかったらそのように変えようとします。私たちが最近聞いたことは、同性愛の結婚であったりします。先日アメリカでは大統領選挙がありました。私たちがこの日本で聞いているニュースと現地で伝えられているものは大分違います。現職の大統領が訴えたことは、聖書に基づいた正しい道徳に従って生きて行くべきだということでした。すると国民は反対するのです。あの国が今どのようなようになってきているのか、よく分かります。そして、私たちの国を見ると実はアメリカよりも多くの問題を抱えています。この国の道徳はどこにあるのか？人々は好き勝手に生きています。なぜこのようなことが起こっているのでしょうか？聖書は教えています。それは神よりも自分の快樂を愛し、神よりも自分の思い通りに生きて行く道を選択しているからだ。だから、世の中はどんどん乱れて行き大変なことになっているのです。聖書はこう言います。「**彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。**」（ピリピ3：19）と。残念ながら私たちの周りの多くの人たちが考えているのはこの地上のことだけです。今さえ楽しければそれでいい、だれにも迷惑をかけているわけではないのだから、それでいいと。今このローマ人への手紙で見てきたように、創造主なる神がいることを知っていながらその神を信じない私たち、その神によってすべてのものが与えられているのにその神に感謝をしない私たち、その神を崇拜しないで被造物を神として崇拜している私たち、そして、このまことの神よりも他のものを愛している私たち、だから神は言われるのです。わたしに逆らっているあなたはわたしの敵だと。ここに人間の大きな問題があることを私たちはしっかり覚えなければならないのです。では、そのような神の敵である私たちはどうすれば神と和解することができるのか、神との平和を得ることができるのでしょうか？

○どうすれば神との平和をもつことができるのか

ルカの福音書に戻って、14節「**地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。**」と、ここに神の敵である私たちが神と和解することができるのか、神と平和を得ることができるのか、それが記されているのです。「**御心にかなう人々に**」と、この「**御心にかなう**」ということばは、別のところを見ると「喜ばれる」と訳されています。それは、イエス・キリストがバプテスマをお受けになったとき天から声がしました。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」と。また、イエス・キリストの山上の変貌というのがあります。イエスが高い山に登られたとき御姿が変わって、弟子たちがそれを見たとき雲の中から「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」という声がしたとあります。この「喜ぶ」ということばとここで言われている「御心にかなう」が同じことばなのです。そうすると、天使たちはこのように言ったわけです。御心にかなう人々に神との平和が与えられる、御心にかなう人とは神のお心にかなう人、神が喜ばれる人だと。神が満足される、神が気に入られる人々です。そういう人々であると聖書のことばが私たちに教えるのです。つまり、私たちが神に喜ばれる者であれば、そういう者になれば、神は私たちに平和を与えてくれると言うのです。神の敵である私たちが神と和解することができるのだと教えるのです。そのためには、神の前に喜ばれる者となることが必要なのです。神に喜ばれる者とはどういう人でしょうか？そのヒントが15節から記されています。

3. 羊飼いたちの行なったこと、彼らの態度 15－20節

「:15 御使いたちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは互いに話し合った。「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう。」:16 そして急いで行って、マリヤとヨセフと、飼葉おけに寝ておられるみどりごとを捜し当てた。:17 それを見たとき、羊飼いたちは、この幼子について告げられたことを知らせた。:18 それを聞いた人たちはみな、羊飼いの話したことに驚いた。:19 しかしマリヤは、これ

らのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。：20 羊飼いたちは、見聞きしたことが、全部御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。」。羊飼いたちはこのメッセージを聞いたとき、そしてその後何をしたのでしょうか？ここに記されています。まず、彼らは非常に恐ろしかったのです。なぜなら、天使が現われたからです。しかし、彼らは恐ろしかったけれどもこの神からのメッセージを聞いたのです。二つ目に彼らがしたことは、実際にその通りかどうか確かめたのです。言われた通りに彼らは出て行ってその幼子を捜し当てるのです。しかも、飼葉おけに寝ている幼子です。そして、三つ目に彼らはこの方を受け入れるのです。彼らがその場所を出て行くとき20節のみことばが教えるように「神をあがめ、賛美しながら帰って行った。」のです。神を誉め称えながら、神に感謝を捧げながら…。彼らは神を信じる者として帰って行くのです。先ほど私たちが見たように、神に喜ばれる者となるために何をしなければならないのか、徳を積んで行く、親切をある期間継続して行く、そういう私たちの行ないによってそうなるのかというと聖書はそのように教えていません。なぜなら、この羊飼いたちがしたことは、神のみことばを聞き確かめ受け入れて行くのです。ローマ5：1を見ると「**ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。**」とあります。神との平和をどうすれば得ることができるのか、「信仰によって義と認められる」ことです。良い行ない、徳を積むことによってとは言っていないのです。「義と認められる」とは正しい者と認められるということです。言い方を変えると、その罪が完全に赦されるということです。神の敵であった者がそのすべての罪を赦していただいて、神の前に正しいきよい者とされるということです。

では、そのような神からの祝福はどうして得ることができるのでしょうか？1節にあるように「**信仰によって**」です。何を信じるのでしょうか？この羊飼いたちを見てください。彼らは神のメッセージを聞いたのです。お生まれになった方は、私たちの罪を赦すためにこの世に来てくださった救い主である、この方は人となられた神であると、そのメッセージを聞き彼らはそのメッセージを信じたのです。つまり、彼らはこのイエス・キリストこそが私の罪を赦すために神が送ってくださった救世主であることを信じたのです。その信仰によって、罪が赦され神との平和を得ることができると聖書は教えているのです。ですから、良い行ないの結果として神が救ってくださるのではないのです。あなたがイエス・キリストをあなたの救い主として、まことの神として信じ従って行く決心をするなら、その信仰によってあなたの罪は赦されるのです。なぜなら、救い主はあなたに代わってあなたの罰をもう受けてくれたのです。救い主はあなたが受けなければならない罪の罰を代わって受けてくれた、だから、私たちは十字架を誇りとするのです。十字架を見ると、人となってこの世に来てくださった神、救い主イエスは私の身代わりとなって十字架の上で死んでくださった、そのことを覚えるからです。そして、約束どおり三日目によみがえってくださった、なぜなら、彼は神だからです。彼は創造主だから、創造主はいのちをもっています。いのちの源はたとえ死を経験してもその死からよみがえることができます。

ですから、この一連の出来事を通して神は何を私たちに教えてくれているのか、まさに、イエス・キリストは私たちの罪を赦すために来てくださった救い主です。自分のいのちと引き換えに私たちに赦し、救いを与えようとしてくださった救い主です。そして、私たちがこの方を私の救い主と受け入れるときに、罪の赦しをいただくのです。羊飼いたちはそうしたのです。そして、赦しを得たのです。そして、この赦しはあなたにも今日与えられます。イエスがこのように言われた箇所があります。「**あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。**」（ヨハネ5：39－40）。非常に驚くべきことをイエスは言われました。皆永遠のいのちを持ちたいと思っているし、皆死んだ後のことを考える、そして、聖書は私たちにどうすれば永遠のいのちを得ることができるのかを教えてくれている、そして、このクリスマスは私たちに救いの希望があることを明らかに示してくれているのです。救い主は来られたのです。あなたのすべての罪は完全に赦されるのです。しかし、イエスは言われます。それなのにどうしてその救いを求めてわたしのところに来ないのかと。これは神の責任ではありません。出て行かないあなたの責任なのです。

今日、皆さんに心からお勧めしたいこと、神はあなたのすべての罪を赦すためにすべてのことをしてくださった、後はあなたがその救いをお受けになるかどうかです、救い主をお信じになるかどうかです、なぜなら、そのときにあなたには救いが与えられます、イエスを信じるという決心が唯一残されていることなのです。救い主は来て救いを備えてくださった、皆さん、あなたはこの救いをいただいておりますか？罪赦されておりますか？それともまだ神の敵として歩んでおりますか？このイエス・キリストの誕生を記念するこの日に、神があなたに与えてくださる神との和解を、神との平和をいただいください。そのために必要なことは、「主よ、私を救ってください、私の罪を赦してください、そして、私にこの救いを与えてください」と神の前に出て行くことです。そのときに、あなたに救いが与えられます。この救いが今日、あなたに与えられることを心から願います。

